ローザ・プルムラ
Rosa Plumula
●茨城大学・大学教育センター
ニュースレターNo.34

目　次

巻頭言 …… 1
センターから …… 2
専門部会から
－諸君の受講を待っています－
…… 2
聞いて欲しい私の意見
－新入生のみなさんへ一言－ … 7
Voice
－私の出会った素敵な授業－ … 9
教養教育古今東西 …… 10

（平成19年4月発行）

ひたすら本に親しみ、一心に考えて教養の大樹を!

学　長　菊　池　龍三郎

平成19年度茨城大学新入生のみなさん、入学本当におめでとうございます。

時代と社会が大変な勢いで変化する中で、みなさんに求められる力も変化してきています。しかし、時代と社会がいくら変化しても、大学生のみなさんに常に求められることがあります。それは、自分の中に自分なりの“教養”を育てることです。ただし、“教養”を育てるとは、ただの物知りや、クイズ番組の解答マシンになることではありません。

企業で長らく新人採用に関わってきた人事担当者が、ほぼ共通して強調するのは、どんな時代でも、“教養”のある学生は、ほんの十数分間の面接でも、すぐに判る、特に読書量がどれくらいあるかですぐ判別できてしまうとのことでした。つまり、様々な分野の読書を辛抱強く続けてきた人は、人間としての幅や高さや深さがあり、考える力があると思ってしまうと言うのです。それを聞いて私は、教養をつくる方法は色々考えられるけれども、系統的、継続的な読書は欠かせないと改めて思ったのです。

みなさんは、「自分には携帯という強い味方がある」と言うかも知れません。“ケータイ”の進化は驚くほどで、今や若者に限らず多くの人々にとっても必須のツールとも言えます。実際、みなさんはもうケータイを手放せなくなっているかと思います。しかし、いつも言うことですが、ケータイだけでは思考力は絶対に育ちません。考える力は、実に文字を逐い、文を辿っていく中でしか育たないことを知ってほしいのです。

みなさんに期待するのは、これからたくさんの本を読み、一心に考える習慣を培ってほしいということに尽きます。では何を読むか。先生方に相談してみて下さい。豊かな読書経験をもつ人ばかりです。一般教養の「知」の大樹を育てる土壌づくりを手伝ってくれるはずです。差し当たっては“知の巨人”立花隆氏の近刊『ぼくの血となり肉となった五〇〇冊、そして血にも肉にもならなかった一〇〇冊』（文藝春秋）などはどうでしょうか。

センターから

大学教育センター

副センター長　佐々木　寛　司

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。大学には、みなさんが待ち望んでいた自由な時間が、目の前にあります。その時間をどのように使うかは、みなさんの心意気次第です。

茨城大学に入学した新入生のみなさんには、大学で基礎教育という授業を用意しています。この基礎教育を取りまとめているのが、大学教育センターです。このセンターはどこの学部にも所属せず、独立した組織として運営されています。そして、学部の専門教育を担当している教員が出講し、基礎教育の理念に基づいて授業を展開しています。また、センターには教養教育係が置かれ、新入生の科目履修などに対応する事務部門として機能しています。

ところで、今日の大学の実情を学生の社会的な特質からみますと、「ゆとり教育世代」が大学へ入学する時代がはじまり、学生の多様化が著しく進んでいることが指摘できます。このような新しい傾向に対処していくため、大学教育センターでは、さまざまな課題に取り組んできました。

その試みの一つとして、新入生に提供する教育を基礎教育として位置づけ、そのなかに教養教育と接続教育の2タイプの授業を用意し、それぞれの目的にあった授業を開講しています。ここに云う教養教育とは、(1)幅広い視野を身につけ、総合的に物事を捉える態度、(2)物事を主体的、批判的に判断できる能力、(3)国際化・情報化社会に主体的に対応できる能力、等々を培うことを目的とした科目群です。また接続教育とは、高校教育からの接続と専門教育への接続という、異なる段階へスムースに移行できるように配慮した、その橋渡しを目的としている科目群です。

自由とは、責任という思考、行為と結びついてこそ、本来の意味を発揮します。大学生にとっての自由とは……、責任とは……。新入生のみなさんに、これからの大学生活で学んでほしいことは、このような社会的態度のもつ意味です。大学教育センターから提供する教養教育を通して、これらの関係を学びつつ、充実した学生生活への第一歩を踏み出してもらえればと、祈念しています。

専門部会から　－諸君の受講を待っています－

人文系基礎教育専門部会長

堀　口　育　男

新入生の皆さん、合格おめでとう。

皆さんはこれから、本格的に専門の学問に進むのに先立って教養科目を修得することになります。教養科目は外国語、健康・スポーツ、情報など様々な分野にわたりますが、「人文の分野」もその一つです。では、「人文の分野」で学ぶのは、一体、どんなことでしょうか。

古くから人間は、人間そのものや心について、様々な問いかけや考察を行ってきました。その活動は次第に体系性のあるものとしてまとめられ、人間文化として形作られてきました。「人文の分野」では、このような問いかけや考察、さらに多様な文化に触れ、広く人間文化への理解を深めることを主眼としています。授業では特に哲学、心理学、歴史学等々の専門領域の題材をもとに人間や文化に対する理解を深めることに力点が置かれています。「人文の分野」には、「人間と思想」「人間と心」「人間と歴史」「人間と文化」「人間と文学・芸術」「人間とコミュニケーション」の6つの授業科目があり、更にそのそれぞれの科目の中に多様な授業が用意されています。

「人間と思想」は、人間が「人間とは何か」「人間にとって幸福とは何か」などの問題を哲学的に追究することから生み出された、様々な「思想」「思考の枠組み」「時代、文化の中での思想の問題」について、共に学び、深く考えます。

「人間と心」は、人間にとって複雑な理性と感情を統括する「心」について、「心とは何か」という根本問

題に迫るとともに、最近多くなっている「心」の病気やそのことによる社会での諸問題について考察します。学生に人気の高い科目です。

「人間と歴史」は、「歴史とは何か」「何のために歴史を学ぶのか」といった根本問題を始め、政治や文化など様々な史実に触れることを通し、人間の本質に迫ります。日本や外国の歴史の授業があります。

「人間と文化」は、人間がかたちづくる様々なレベルの社会集団の共通性や異質性の総体である「文化」について、文化の特質、形成や変容について考察し、人間の属性を明らかにしようとします。留学生とともに学ぶ授業もあります。

「人間と文学・芸術」は、人間が心ゆたかに生きていく上で不可欠の存在である「文学・芸術」について、その実態に触れるとともに心が本当に必要としているものは何かを考えます。合唱やペン習字の実技なども含まれます。

「人間とコミュニケーション」は、人間だけがもつ「言語」による高度な「コミュニケーション」能力について、「言語」とは何なのか、如何にして人間は言語能力を獲得するのか、さらにコミュニケーションのメカニズムやメディアとの関係などを考えます。

一口に「人文の分野」と言っても、内容はこのように盛りだくさんです。多くの学生は、この中から必要な単位数に応じて、自分で選択して履修することになります。さあ、あなたはどんな授業を選びますか。迷ってしまうかもしれませんが、シラバスをじっくり見て自分が最も興味のもてる内容の授業を選んでください。

社会系基礎教育専門部会長

佐　川　泰　弘

みなさん、入学おめでとうございます。

大学では「履修科目」を自分で決めなければなりません。自分のホームルームもないので、空き時間はどこで過ごすかも考えなければならない。晴れて大学生になり、自由になったのに「自由」も楽ではないですね。

この「自由」という言葉一つとっても、いろいろな学問分野から、いろいろな説明がなされています。社会科学には、法学、経済学、経営学、政治学、社会学などがありますが、やはり「自由とは」についても説明の仕方が異なります。それは、対象としている人間の行動を分析する方法が異なるからです。例えば、私は政治学を専門としています。政治学の世界では、自由は近代市民革命の結果、市民が勝ち取ったものというのがオーソドックスな定義でしょう。それはともかく、どの分野でも「自由」が大切な価値とされていることは言うまでもありません。

しかし、誰の何の自由も無限に認められるべきかどうかといえば、人によって意見が異なります。一方では、経済活性化のために企業の自由な活動を保障すべきである。そのためには規制緩和をしなければならないという考え方があります。他方では、労働者の働き過ぎや過労死を防止したり、地球環境を守るためには企業の際限ない自由な営利活動は規制されるべきだという考え方もあります。

社会は、人々のこうした「自由な」考え方、価値観がぶつかりあって動いていきます。それが民主主義社会です。結局のところ、物事が多数決で決められることは事実ですが、それまでのプロセスで、人々がいろいろなことを考え、意見を表明し、行動しているのです。

「自由」だとはいえ、何をどう考え、どうしていったらよいか。それはとても難しいことです。大学教員も実は明快な「正解」を持っているわけではありません。

教養の社会系授業の目的の一つは、みなさんが当たり前だと思っている価値観を少し見直してもらうことです。試験のために、あれこれ覚えなければという時期をみなさんは無事にクリアしました。これからは、世の中がどう動いているのか、その何が問題なのか、どうすればよいのかを考えることが、みなさんの仕事になります。

「偉い社長や、政治家や、お役人や、専門家に期待する」「任せておけばよい」とみんなが思ってきた結果が、現在の社会です。これからは、みなさんが専門家になるかどうかは別として、自身が頭を使うしかないわけです。

社会系の授業は「当たり前」のことを習う時間ではなく、これから「どうすればよいのだろう」を考える時間にしたい。担当教員は、そう思って授業に臨んでいます。

自然系基礎教育専門部会長

曽　我　日出夫

大学の授業科目は、大きく教養科目と専門科目に分かれています。この教養科目の役割は何でしょうか。いくつかの役割がありますが、重要なものとして、①学問が専門化される以前の原型を学ぶことや②各専門への基礎的な知識や能力を身に付ける役割があります。これらのことは、何かを「覚える」ということで身に付くものではありません。はじめて造った人（創始者）の作業を自分で体験することで得られます。結論めいた知識としてまとまっているものでも、いろいろな人がさまざまな試行錯誤をへて造ったものです。その試行錯誤に近い作業を多少なりとも自分で実行しないといけないのです。時間がかかっても、こういう作業を通さないと将来役に立つ知識とはならないのです。

上記の①と②のために分野別教養科目と分野別基礎科目があります。自然系基礎教育専門部会はこれらの自然科学に関わる科目について、授業科目の編成や企画さらに点検評価などを行っています。しかし、個々の授業担当は各学部のいろいろな先生で分担し合っています。この中で現在課題としていることは、分野別教養科目の各科目を専攻分野が違っている学生にも取り組みやすい内容にしていくことです。さらに、分野別基礎科目を、基礎の習得ということで確実なものにしていくことです。このための新しい試みとして、実験を取り入れた授業を用意していこうとしています。今年度は後期の分野別基礎科目に、物理学と化学の実験科目を実験未経験者向けに開講します。

分野別教養科目は、実際に授業を取ろうとすると、多くの場合かなり選択の幅があります。そのとき非常に役に立つのが、入学のときに配った「シラバス」とか「授業計画」とか呼ばれている分厚い本です。この本には、各授業がどんな内容なのか詳しく書いてあります。ぜひ、多少時間がかかっても、よく読んで授業選びに役立ててほしいです。

総合基礎教育専門部会長

関　　友　作

教養科目には、いろいろな種類の授業があります。その最後が「総合科目」です。総合科目って、いったい何でしょう？

辞書で「総合」をひくと、「別々のものを一つに合わせて、まとめあげること」とあります。ちなみに、反対語は「分析」です。分析とは「複雑なものをその要素に分けて、はっきりさせること」です。

分析といえば、教養科目の区分にもみられるように、学問には、じつにさまざまな分野があります。そして、各分野は、さらに細かい専門に分かれています。これは、複雑な社会や自然を、人間が部分に分けて、はっきりさせてきた結果です。だから、分析の産物といえます。歴史とともに分析は進み、細かい分野は、どんどん増えてきました。

ただし、分析するばかりだと、多くの分野が生まれる一方で、全体としてのまとまりが薄くなっていく可能性があります。そこで、総合することも必要になってきます。別々の分野を組み合わせてみることも、大切なのです。

じっさい、世の中の問題には、一つの分野の成果だけでは解決できないものが多くあります。たとえば、環境問題に対しては、複数の分野の協力が必要です。また、その影響も、多面的で全地球的です。

つまり、タテの方向に深めていくのが専門だとすれば、ヨコの方向に広げていくのが総合だといえます。総合科目も、ヨコに広げていくこと、つまり、複数の分野の「つながり」を目指しています。

そこで、総合科目では、専門分野がちがう教員たちが担当する講義や、学外の講師に来てもらう講義もあります。学外の講師は、他大学の先生だけでなく、社会でさまざまな仕事についている人びとが来られます。彼らも、講義のテーマと何らかのつながりがある人たちです。

ところで、わたしは、自分とは別の分野の先生方と話すことがよくあります。おたがいに専門はちがいますが、話していると、「おや、そうなのか」と思うことが、たびたびあります。相手の先生も、たぶん同じでしょう。

じつは、どんなに関係ないと思っている二つのことにも、よく聞いたり見たりしていると、重なってくる部分、つながりあう部分というのがあります。そして、その発見は、自分の専門にとってもヒントになること

が多いのです。

皆さんには、総合科目をとおして、いろいろなものの間にあるつながり、そしてまた、一つのものでも、さまざまな見方ができることを感じてもらいたいと思います。これはつまり、頭をやわらかくすることといえるでしょう。そのためのお手伝いができれば幸いです。

外国語基礎教育専門部会長

青　木　研　二

みなさんは、外国語の学び方について考えたことがあるでしょうか。このことについてひとつの考え方を示してみたいと思います。

外国語を学ぶやり方に関して、「聞く・話す」を重視する学習法（話しことばからのアプローチ）と、「読み・書く」を重視する学習法（書きことばからのアプローチ）とにとりあえず分けて考えてみることにしましょう。

話しことばでは、当然のことながら複数の対話者の存在が想定されているわけですが、そこでは文字以外の様々な要素がかかわっています。たとえば、発音のイントネーション、表情、身振りなどが加わっています。それゆえ、まったく同じ表現であっても、色々な意味合い・ニュアンスがつくり出されているのです。しかしそれだけではありません。話しことばが流通している日常生活の中には、もろもろのシチュエーション・背景が存在しており、それらと話されることばとの関係性を、体験をふまえてしっかり把握しておくことが重要なのです。外国語の学習にとって問題となるのは、外国語が話されている日常生活の環境の中に身を置いているわけではないので、そうした環境性と話しことばとの間の対応関係をありありとイメージするのが難しいということです。たとえば、フランス語で「ボンジュール」という挨拶がありますが、これは日本語の「こんにちは」とは使われるコンテキストに相違があり、必ずしも等価ではありません。コミュニケーション能力とは、理想をいえばそうしたコンテキストのズレを五感的・体感的に習得することなのです。しかし、そのズレを体感すべき日常生活的な背景・環境を、当該外国語が話されている地域以外では見出しにくいことも確かなのです。

そもそも、独・仏・スペイン語などでは、外国人との直接的な会話体験がなかなか得られにくいのですが、この場合できることは、まずもって、CDや、ビデオ、DVD、映画、TVの語学講座などを利用して、話しことばの流通する様々な環境にふれる機会をできるだけふやすということだと思います。色々な状況・場面で交わされる話しことばを「聞く」機会をできるかぎりたくさんもつのが重要なことになるのです。

ところで、書きことばからのアプローチはどう考えるべきでしょうか。大学では、未修外国語の学習方法として、基本的な文法を覚え、辞書の引き方に習熟するという伝統的なやり方があります。この学習方法によれば、かなり難しい文章でも短期間でそれなりに読めるようになるので、書きことばの世界に限定すれば、なかなか効率的な学習法であるといえます。しかしながら、書きことばには、文字以外の情報が乏しく、話し手の発音のイントネーションも表情もありません。そこにはやはり味気なさもついてまわることでしょう。とはいえ、さらにひるがえって、話しことばの世界はどのようなものなのかと考えてみると、挨拶のことばに象徴されるように、まずは定型的な言葉をとり交わすこと自体に意義があるといえます。ある人の表現を借りていえば、<コンタクト>すること、ふれ合いの関係をとり結ぶことにそもそもの意義があるのであり、密度の濃い情報を交換し合うことを第一の目的としているわけではありません。

これに対し、書きことばの世界では、直接的・体感的なコンタクトを実現することはできません。むしろ、表現されている<コンテンツ>の方が重要になってきます。本来、複雑性・抽象性の高い内容を表現するには、話しことばよりも書きことばの方が向いています。日常生活のレベルを離れた、複雑性に富んだ知識・情報を得たいのであれば、話しことばで外国人とコンタクトをとるよりも、書きことばの世界にアクセスした方が、自分のめざす情報を得られやすいことは確かでしょう。

話しことばと、書きことばのどちらにより価値があるかということではありません。どちらが自分の抱いている関心・興味にかなっているものなのかということが肝腎です。とりあえずは、外国人とのコンタクト

に充実感を味わいたい人は話しことばの能力を伸ばし、情報の内容、コンテンツに興味がある人は書きことばにかかわる能力を伸ばすことをめざせばよいのではないでしょうか。むろん、どちらにも関心があって、両方の能力を伸ばしたいというのであれば、それにこしたことはないわけですが。

もうひとつ最後にいいそえておけば、外国語の力を伸ばすためには、モチベーションをもっていることがやはり大切だと思います。日本語で書かれた情報であってもかまいませんから、自分の学んでいる言語が使われている国々の社会や文化について、積極的に知識を深めて行くことが必要です。そのことを通じて、ことばと社会的背景とのつながりを見つけ出したり、ことばの奥行きを感じとって行くことが可能になるからです。

総合英語教育専門部会長

小　林　邦　彦

経済・社会等のグローバル化が進展する現代社会においては、国際共通語としての英語による実践的コミュニケーション能力を身に付けることがますます重要になってきています。それは進学や就職時に英語能力を重視する教育機関や企業が激増していることからも明らかです。ある統計によると、主要企業のうち、新入社員採用時にTOEICなどの英語力テストのスコアーを考慮するものが59.2%、今後考慮予定が20.6%と、主要企業全体の8割近くが実践的英語力を要求してきています。従いまして、英語はもはや授業の１科目ではなく、大学卒業後社会人として自分の可能性を広げるための道具としてとらえることができるでしょう。茨城大学ではこれらの状況をふまえ、実践的コミュニケーション能力の育成を目指した「総合英語プログラム」を、2005年度より全学部に導入しています。

「総合英語プログラム」は、英語の4つの技能（reading, writing, listening, speaking）を総合的に習得する4技能習得型の授業と、各学部の専門教育に必要となる英語能力との橋渡しを目的とした学術用英語（EAP）からなり、入学後の英語実力テストの結果により、習熟度別の5段階クラス編成がなされます。特に4技能習得型の授業では、これまで学習してきた英語による受容能力（receptive skills）の定着を図りながら発信能力（productive skills）の養成にも力点を置き、使える英語力の育成を目指しています。また、コンピューターを利用した英語の自主学習プログラムも導入しており、英語を多面的に学習できる環境を整備しているところです。

この総合英語プログラムの授業に積極的に参加することにより、「世界へアクセスする能力」「グローバル・リテラシー」（国際対話能力）を養い、自分の可能性を切り拓いていきましょう。

情報基礎教育専門部会長

羽　渕　裕　真

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。いよいよ大学生活のはじまりです。どのような授業が行われるのか、どのようなサークル活動があるのか、期待と不安で一杯だと思います。皆さんが大学で学ぶべきものとして教養科目があります。その教養科目は皆さんが大学在籍中・大学卒業後も充実した生活を過ごすための手助けをしてくれることでしょう。教養科目の一つとして、情報関連科目が用意されています。

WWW（World Wide Web）が提案されてから20年も経ていないのにもかかわらず、コンピュータネットワーク（インターネット）は今やテレビ・電話・ビデオなどと同じように生活に密着してきました。また、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）のようなコミュニケーションの場を提供するサービスも生まれてきました。これから、より一層情報化社会が成熟し発展することでしょう。そのような社会を担っていくには、やはり「読み・書き・算盤であるコンピュータの操作技術の修得」だけではなく、「情報を活用する力」や「情報倫理と呼ばれる情報を活用する上での道徳」が必要になることは言うまでもありません。

情報関連科目では、安全なコンピュータ利用やネットワーク利用のために「コンピュータおよびネットワーク利用のためのルール、マナー、情報セキュリティポリシー」を必須項目として学びます。それと同時に、「コンピュータで何ができ、どのように利用できるのか」「コンピュータやネットワークはどのように動作しているのか」「情報を正しく獲得し、発信するにはどの

ようにすればよいのか」などを体験的に学びます。情報関連科目は基本的に実技を通して自ら学ぶわけですが、重要な点は理解できないことを単にウェブサイトなどから情報を得て自己完結するだけでなく、担当教員やティーチング・アシスタント（大学院生の先輩）に積極的に質問し確認し、なるべく早く問題解決することです。この情報関連科目で学んだことは、専門科目を含んだ色々な講義の調査やレポート作成、就職活動に直接的に威力を発揮するにちがいありません。また、インターネットが上手に正しく使えるようになり、いわゆるインターネットトラブルとは無縁のキャンパスライフを過ごすことがきっとできるでしょう。

この授業科目で学んだことを活かし、楽しい大学生活を送ってもらいたいと願っています。皆さんの受講をお待ちしています。

健康・スポーツ基礎教育専門部会長
勝　本　　真

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。ようこそ茨城大学へ！

茨城大学で充実した日々が無事スタートしたでしょうか、それとも悪戦奮闘の毎日を過ごしているでしょうか。時間に追われて、自分の身体を見直す時間もないのではないでしょうか。健康・スポーツ科目は、みなさんの身体に着目した授業です。

健康・スポーツ科目は、前期か後期のどちらかを選択し、週一回の授業を15週実施して1単位を取得できます。これを1年次、2年次でそれぞれ1単位ずつ取得して、合計2単位を取得しなければ卒業できない大切な授業です（1年間で2単位取ることはできません）。授業を受ける曜日・講時は、学部・学科・学年によって指定されていますので、間違いのないように受講してください。開講されている種目は、高校の保健体育とは違って野外・山野、ウォーキング&ジョグ、ネットスポーツ、エアロビクス・ダンスなど様々な球技と幅広い種目を準備していますので、新たな運動・スポーツにチャレンジしてもらいたいと思います。今までの体育のイメージで、体力の向上や運動技術の習得が、授業の中で一番の目的ではないかと考える人が多いかもしれません。しかしこの授業では、上手い下手や体が強い弱いが重要ではなく、スポーツを通していかに自分の身体と向き合って、自分の身体を理解するかが大切になります。また運動・スポーツを通して、色々な人達と接して活動しますので、コミュニケーション能力も大切になってきます。週一回の身体をリフレッシュする貴重な時間ですから、積極的に身体を動かしましょう。

高齢化した現代社会の中で、社会人として当たり前のように健康的な生活を送ることが、これから大切になってきます。しかし現実の社会は、あまり身体を使わずに生活できるように進歩しています。そのような時代だからこそ、自分の身体としっかり向かい合い、自分を理解することが大学時代に重要だと思います。親元を離れ生活して初めて親の有難さがわかるように、けがや病気をして初めて健康の有難さを痛感します。健康的な生活習慣の育成に運動・スポーツは重要な要因であり、この授業で学ぶ健康やスポーツに関する様々な知識を十分活用して、自分の健康な生活リズムを大学時代に築いてもらいたいと思います。

聞いて欲しい私の意見　－新入生のみなさへ一言－

石　川　侑　子（人文学部 人文学科）

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これから新しい生活が始まるわけですが…皆さんは入る前に「大学は高校とは違って、自由である代わりに何でも自分でやらなければいけない」とか「行動は自己責任」などという話を聞いてきたかもしれません。それは確かなことですが、けしてめんどうくさいことではありません。自分で何でも責任を持ってやったほうが充実していて気持ちいいし、より多くの経験ができるからです。そして私はその経験というのが多ければ多いほどいい大学生活にすることができると思います。

私は3年生になるところですが、まだまだ大学生活というものをつかめず模索中なのでえらそうな事は何

も言えませんが、私が自分の体験を通して考えたことを少し言わせてもらおうと思います。

私は今一人暮らしをしていますが、1年生のとき、実家から大学まで片道約2.5時間かけて通っていました。通いにかなりの時間がかかり帰る時間も安定しないので、サークル活動やバイトもあまりする気が起きず、結局大学と家を往復するだけの毎日でした。入学前はやりたいと思っていたこともそれなりにあったので、通っていた当時も含めてつい最近までその1年間がとてもつまらなく、無駄にしてしまったと考えていました。一人暮らしになったことで普段の自由な時間が増え、バイトもできるし、夏休みにはインターンシップや考古学の現場見学(私は考古関係の専攻なので)もでき、通いの時期に比べてとても充実していたということもあります。でも最近になって、そうでもなかったと思うようになりました。もっとできたはずの行動が消極的だったことに関して多少後悔はしていますが、通っていたときも小さくても多くの経験をしたし、それなりに多くのものを見られたことで知識も増えました。それは最初から一人暮らしをしていたら得られなかったもので、無駄ではなかったと今は考えています。

つまり何が言いたいのかというと、自分の経験を活かすのもだめにするのも自分次第の部分が大きいということです。どんなにすばらしい経験をしても気づかなかったり活かせなかったりしたらそれは意味のないものになってしまうし、逆にどんなに意味がないと感じることでも別の角度から見れば意味が見つかるかもしれないのです。ですから、皆さんにも多くの経験をし、また日々の生活から見つけていってほしいと思います。きっと充実した大学生活になると思います。積極的に行動してみてください。

仁　平　裕　子（理学部 学際理学コース）

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。辛かった受験を終え、新しい土地での新しい生活が始まり、期待で胸が膨らんでいることと思います。しかし一方で、わからないことばかりで不安もたくさんあるでしょう。そんな皆さんへささやかではありますが、皆さんより先に茨城大学に来た私から、大学生活へのアドバイスをさせていただこうと思います。

高校と大学で一番異なるのが『自分で生活する』という点です。今までは、ほとんどの人が親元で学校に用意された授業・カリキュラムを受け、学校を勝手に休んだら親や先生に注意されるという生活を送っていたと思います。高校までは親や先生の目の届く範囲で『あらかじめ用意されているもの』をこなしていく生活でした。でも、大学は違います。授業を自分で選んでカリキュラムを組み、授業を休んでも誰からも注意されないかわりに授業を休み続ければ単位も取れず、卒業できなくなってしまいます。さらに大学で学ぶ範囲は広く、自分で知識を深めていかなければなかなか身に付きません。また、多くの人が始める一人暮らしは炊事洗濯、家計のやりくりなども全て自分でやることになり、私生活面でも『自分で生活する』ことになります。大学では全てが『自己責任』で、自分で考えて自主的に行動しなければならないのです。

こんな風に書いてしまうと「大学って厳しい世界だな」と、始まる前から心細くなってしまうかもしれませんが、皆さん、物は考えようです。自主的に行えると言うことは、自分がやりたいことにもどんどん挑戦できるということです。学業だけでなく、アルバイトやサークル、ボランティア活動まで。実は、大学は人生の中で一番自由な時間があるときなのです。是非色々な事にチャレンジしてみて下さい。また、勉強やサークルを通して、信頼できる友人や尊敬できる先輩を見つけることも、大学生活ではとても大切なことだと思います。家族と離れて一人で不安なときに、そんな友人や先輩が居ることが前に進む活力になります。

大学生活はあっという間です。私も、入学したと思ったらもう3年生になってしまいました。時間は皆平等に流れますが、この4年間で何を学び何を身に付けることができるか、全て自分次第です。10年先の自分を思い浮かべながら、目標をもって、大学生活を有意義に過ごして下さい。

最後になりましたが、皆さんの学生生活が実り多いものであるよう、心から応援しています。

Voice －私の出会った素敵な授業－

小　池　沙和子（教育学部 教育基礎選修）

私の大学での学びも2年が経とうとしています。同時に、大学という場所が私にとっては様々な物事を様々な視点から考える場であり、さらには多くの気づきや発見を獲得する場ではないかと、身をもって感じている日々です。

大学に入学し、教養科目と専門科目によってカリキュラムが構成されているということを初めて知ったときは、なぜ教養科目を学ばなくてはいけないのだろうと、あまり積極的にはなれませんでした。しかし、今では、教養科目こそ大学での学びには欠かせないものなのだと思っています。

そんな教養科目の中で、私が受講して特に興味深いと感じたのが、心理学と社会学の授業でした。どちらも授業の題目は「入門」や「いざない」といった、入学したてで戸惑いの多かった私にとっても、非常に受け入れ易いものでした。そして実際に受講してみると、だんだんと、未知の学問分野を興味深いものとして捉えられるようになりました。

心理学の授業には、それまで抽象的なイメージしかなく、極点なことを言えば人の心を読み解くことができるようになるのだろうか、などという浅はかな頭しかありませんでした。しかし心理学とは、非常に論理的で緻密なものでした。人の心を完全に理解しようとは言わずとも、どのような尺度で、どのような分類で判断は可能なのかを、実践的に示してもらいました。また、社会学の授業では、「そもそも社会学とはどのような学問なのだろう」という私のような学生にとっても平易な言葉で、要点だけに絞られた分かり易いものでした。自分と他者との関係性、他者がいることによる自己の存在の認識などを学んだときは、非常にうれしくなったのを覚えています。新しい学びに触れることがこんなにも充実感を得ることができるのか、ということを初めて感じることができたのではないのかと思います。

現在は専門科目をメインに学んでいますが、改めて教養科目での学習の重要性を感じることがあります。ある問いに対して主観的になり過ぎず、あらゆる視点から分析、思考すること、社会学的な考え方を用いて自分なりの考えを持つことなど、教養科目で得た知識や考え方は、確実に自分の学びの土台になります。私の出会った教養科目の数々は、大学での学びの可能性を大いに広げてくれる強い味方となっています。

荒　井　未　緒（工学部 都市システム工学科）

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。苦しかった受験も終わり、不安を抱きながらも新しい生活に期待で胸を膨らませていることでしょう。高校までとは違い、大学では自分で興味のある授業を選ぶことができます。特に、教養科目では専門科目とは違い、自分の学科の勉強以外の分野についても学ぶことができます。私が受けてきた授業の中にも、「アメリカンポップカルチャーと日本」という印象的な授業がありましたので、紹介したいと思います。

この授業は文字通りアメリカのポップカルチャーについて学びます。カルチャーと言っても堅苦しいものではなく、映画や、ダンス、音楽、アートなど普段みなさんの身近にあるものを題材としています。毎回、その道で活躍されている講師の方々がいらしてお話を聞かせてくれたり、ライブを行ってくれたりします。大学の授業というと、大きい教室で大人数でただ先生の話を聞くだけのイメージがあるかもしれません。しかし、この授業では聞くだけではなく、実際に身体を動かして踊ったり、歌ったりすることがありました。周りは知っている学生だけではなく、学年も様々ですが、歌や踊りによって一体感を味わうことができました。また、私は今までアートにはあまり興味がありませんでしたが、この授業で現代アートを取り扱ったのがきっかけで、すこしずつ興味がわいてきました。

高校までの授業とは大きく違い、大学の授業ではさまざまな文化を学んだり、自分の専門分野とは違う分野について学ぶきっかけを得ることができ、視野を広

げることができたように思います。必ずしも、自分の将来に直接的に役立つかはわかりませんが、いろいろな発見ができると思います。今回紹介した授業意外にも面白い授業はたくさんありますので、みなさんも積極的にいろいろな授業に参加してみてください。大学生活は意外にあっという間に過ぎてしまいます。充実した楽しい大学生活を送ってください。

教養教育古今東西

大学の授業風景、今と昔の大きな違いは何か？授業がプロジェクターなどを使ってビジュアル化されて進められていること。学生は、容姿風貌の変化は別として、ケータイをみんなが持っていること。そして、紙に印刷された辞書ではなく、「電子辞書」を持っていることである。

電子辞書はたしかに便利である。収録しているのは英和辞典や和英辞典ばかりではない。国語辞典、漢和辞典、逆引き辞典、現代用語辞典、とっさの英会話、海外旅行英会話、ことわざ辞典、冠婚葬祭マナー、家庭の医学、百科事典など数10にものぼるコンテンツを収録している。これさえ持っていれば海外に行っても不自由はない。英和辞典の機能についてみれば、われわれが使っているような植物の専門用語は、もうとっくに収録している。私は電子辞書の宣伝をしているのではないが、そのメリットには目を見張るものがある。学生がケータイにつぐ必携アイテムとして携行するのも当然かも知れない。そして私もその恩恵にあずかっており、とくに海外に出かけるときにはコンパクトタイプを携行している。

一方、現代生活にインターネットの存在は不可欠である。情報収集、電子メールや買い物など、かなりのことができる。調べ物をしたければ、検索エンジンにキーワードを入力し、「検索」ボタンをクリックするだけで、何万、何10万というWeb情報を見ることができる。重い百科事典や図鑑などはもういらない。

また、パソコンのワープロソフトにもインターネットのメリットが活かされている。最近のワープロソフトでは、たとえば、「原稿」という入力文字にカーソルを移動して「翻訳」ボタンを押すと、すぐにその英訳「manuscript」が出てくる。しかも、入力したつづりに間違いがないかをすぐにチェックしてくれる。たいへん便利である。

では、このような電子辞書やワープロ・インターネットなどに欠点はないのか？　それがあるし、大いに問題なのである。

たとえば電子辞書である単語を引いたとき、例文や用例を見ることはできない。全体を見渡すことができない。関連情報を得ることはむずかしい。こんど一度、英和辞典のあるページを開いて、じっくりながめて欲しい。見慣れた単語でも、上下の欄にはこんな単語があったのか、こんな用法があったのかと、必ず発見があるはずだ。

前出のインターネット検索には正しくない情報も多く含まれている。しかしこれを見分けるのはむずかしい。また、やはり情報は断片的である。

そして何よりも危惧していることは、こうして得られた情報が一時的・一過性であり、豆知識に過ぎず、自分の身にならない、智の集積ができないことである。電子辞書やインターネットの操作方法に習熟するばかりで、「知識の使い捨て」である。

大学生の皆さん。電子辞書とインターネットを使うなと言っているのではない。ぜひ、使い分けをして欲しいのである。そして、その場しのぎの豆知識の習慣を常態化するのは、少なくとも大学生のうちはやめて欲しい。せっかく身につけた知識・知見まで、使い捨てにしないで！

（農学部　新田　洋司）

発行日　平成19年4月
発行者　茨城大学　大学教育センター
水戸市文京2-1-1
029（228）8416（学務課教養教育係）